

セッションⅢ「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」のねらい

河野 通明

セッションⅢは「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」というタイトルを掲げたが、なぜこのタイトルなのかについて説明しておきたい。われわれ神奈川大学 COE は「人類文化のための非文字資料の体系化」という大きな看板を掲げているが、文化というのは人類がまわりの自然環境の中で生活していくために、人類と環境との間のクッション材として衣服や住居や弓矢や鋤などを生み出していくものなので、その点で自然環境が規定的な意味を持っている。ところが現在我々が見ている各地の文化は、その土地、その環境のなかで生み出されたとは限らない、なぜなら人類は民族移動を繰り返しているのです、よその土地で形成された文化が民族移動にともなって違った環境にもちこまれたという現実がいくらかでもあるからである。20 世紀後半の東アジアの文化研究をリードしてきた照葉樹林文化論は、その点のチェックを欠いている。たとえば照葉樹林文化論の舞台である雲南省の少数民族のほとんどは中国各地から移住してきた人々であり、他の環境から持ち込まれた文化が混在しているはずである。したがって文化の研究には、研究対象とする地域の人々が元からそこにいたのか、あるいはいつどこから移住してきたのかという基礎的検討が必要であり、そのためにアジア規模で展開されてきた民族移動の復元に取り組もうではないかというのがセッションⅢの設立趣旨である。

中国については古くからの文献が残されているが、朝鮮半島や日本では神話の領域で文献史料の射程距離外にある。ところが民具の犁は形が容易に変化しないことが確認されており、たとえば日本では 20 世紀の民具から 6～7 世紀の朝鮮系渡来人の伝来状況が具体的に復元できる段階にきている。そこで東アジア全域で犁の形態比較をしたならば、中国で犁の登場する戦国時代以降、過去 2500 年間のアジア規模の民族移動が復元できるであろう、というのがセッションⅢの見通しである。

そこで報告者は、中国はたびたびの現地調査で民具と考古資料の両面から犁耕史を追っておられる東海大学の渡部武先生、韓国は民俗調査・農具研究の大家で仁荷大学校名誉教授の金光彦先生、日本は26年来各地の資料館を回って犁調査をつづけている河野が担当、コメンテーターは昨年「中国の犁の起源・形態とその分布」の報告をいただいた雲南大学の尹紹亭先生にお願いした。

東アジアの犁研究は日中間については渡部氏を軸にしてそれなりに交流はあったものの、全体的には自国内で研究を蓄積している段階にあり、この日韓中の犁研究者が一堂に会するのは今回が初めてである。したがってまずはそれぞれ異なった研究環境で進められてきた成果を「東アジアの民族移動に迫る」というテーマに沿った形で報告し合うことで、研究のすり合わせを行うことが今回のシンポジウムの役割と位置づけており、それを通して今後の共同研究の基礎固めができるなら、このセッションは大成功といえよう。